和漢文藻

論類　解類
箴類　記類

六

文庫
へ5
686
6

門へ 686 巻 6

東京麻布区霞町十番地 坪内雄蔵

和漢文撰卷之六

○論類

佐利論

張昇角

明治三十六年十一月五日 坪井雄蔵氏寄贈

世人より国のうつハ拙なる唐の古和のたくみなるとなく
て世人の風俗とたがへれとも唐土の俗人なれはの彩き
とかく紙なの能諸卿を佐利の器ちる形をかゝりて
されハ此拙の世ともるるへ陶とこの器ハ陶器なり
中り俗なの表ふるを嘉業とけ不天ともまるく地を
さつてうれ帝然不動のかゝちとなる屋のをうりとなる

大高氏寄贈

686
6

そもそも名もそのうりをけねんきるに指とふ拙い
かりも森こうろへ院籍こはもれ起てたこけ渕ぬ
こたりれく部はこんのいと毎あきを性利へ柳のけく
うつくまりて酒の拓りとやうんしおり汲やそこの客
ありて水とくきこはらふ和し廉れる雪に
法利をいうこて森て舟る指こゆとてはこ毎こ
ぬうきそれ傘の汚はこきをれて和中の内に
きんもきやこに性利の茅花を陽をこ表の祝へ
はをさうして苔の西毎茅のあこと拓こ乃
部屋こりこも南の第月こ入れおぬく

第人の茅ていはれこのもりかけ房のうきをふ
れくふとこ水性利と呼れるる部の法こや
ちこうきやきこいはこ指り組こりめり指
も茅擦の茅水ふきこ武陵の市こ書こあこ呼を
蓑(コモ)かりの名ここて拓こ毛の言めこもあこきこ
茅をみを痛の紙こ拓こ房のに行廂(カヒ)こ
きをはるとは利を紙詩とあこひて世界のきひと
きれるら纐纈の抹こ和茅の酒とあこも茅茎の
おに茅今の盃とはくれこも宮きをく大毎い
こて三茅二陽のこ茅用とはくこるこて肉(ニキロ)茅こ舩の

あれうを尚おしたれうかし如の紙諧うを南京
交趾の婿とかうり唐は佛宝の名とあうかつて
うて徒うかのあうれて尼達のたうを美体ほ
うり考ほ部のあうひを新の調ゑうもありわをを
▲買臣ら綿手をたうをあをを高慶の心宗より
ちて飴茶の名とを忘ほんを。又ふうの指手あをを
て指とし指をの色香とあををて婦まいををの指
をををれを顔以北切法の法とをくをあを
○註曰△易繫辞寂然不動感而遂通天下之故 ▲晉史
阮籍能口嘯青白眼ハ睨ム時ハ△阮明賦有酒盈

楊 ▲武陵ヲハ江戸ノ市より津国ノ伊丹酒ヲ上品トスハ船中
ノ女房ナカラ店ニ積テ女房被ト八新到ノ称ナリ △白氏文集ニ
黄纈纈林寒ノ直ノ菓ハ林向暖酒焼紅葉ハ二月ノ詩 △武氏文集ニ
入テ百ト成セリ△僕武故事ニ美客ヲ歌テ通天基ノ上ニ
露ヲ承ル玉ヲアリ掬スルニ此一對ハ故事ヲ採リ古語ヲ換ム轉換ハ自
在ノ錦ト云ハシ去ル八纈纈ト芙蓉ト連綿ヲ對セントテ基ノ一字
ヲ錆綜セシハ林ト基ノ字對ヨリ紅葉ト黄金ノ光敷ハ言ハ
ス格ニ入ル。照ノ絶妙ト称スベシ●岑参四休詩ニ三平二滿餘鄙
休ス云ヘ三平二滿ハ顔ノ高低手後語ニハ鄙ノお福也 △後書ニ
上銭ノ朱買臣曾祇古大守ニ回富貴不帰ニ古郷ニ如ニ衣錦夜
行 ○一休和尚ノ示ニ拈香ヲいつこのかくこのかを於ヲあを
こる又上いつ△顔以北功徳ハ念仏ノ結文ノ徳ノ結語より

○源氏論を始より終まで拾ひ集めて一篇の論を作りて
人間一生の光景を作りなしたる事を及ばずながらも
いかばかりなるべきなれども
名を実に世界の色彩とをもてなんやまして法利の
きわめて設論の筋をもけるもの

園論

岸倚彦

いつしか読みつゝ月日を経て菜汁米の飯
神祇釋教を論ずるもの多くして
人の皇のまことあるべきや神仏もまた人のまこと
におわしますことをよく考へ見れば法氏所の

園とおもふる言葉あるべきや世の積りもいつ
あるべきかはまた秀人の分をかへりみる始を命とも
へてはもとより意味あるべきんと世事の園とおもふ所道
和歌の道の偏にして世をいとう隠の酒のうち春雪
花の吉野にて屋敷の拾ひ集めし月雨雪のうち
ふりつゝ命あるまことの道まことに法師の産まれて
きてかはまた稽書にはたゝ人と世事をふるしたる所
い我家の義はたゝ言はんかのるをとおもふる山園とおもふ
とおもふる人の表裏とをきやはらいくの風雅と
ふるに月のおはたゝ園のおのの油もと

たゝれん法と言ふ人の説ふ所にて連珠体に
準ずる月ごとの花をうたふあり〻作法とて▲園の
瓢とかたりあり其の言葉を命じられい唐人あり今は
商をして嘘八百の論をいふべきなり
○註曰合せれく舟に乗り合せて物のたゝかひをいふ和
一方のおもむきからりと表のこゝろをそなへられ中略 非仏
もんのさまにてねはおもうるとあり △おもう 言葉こ
あり其の外の雲も人のやうる物とおもはれ
いあり作れく一部の作法也 ○たゝかひ義 義 稽 書
て作るべき人のさまあり作法 △波愚ト八論語ノ聖意ニヤ
類回ト伯玉ト愚ヲ答玉ヘリ ▲園夜ト八瓢ノ花生ノ名ニテ

跡先ノ知レヌトニフ意ナリト然ル此論ニハ瓢ニ談論ノ名ヲ假
テ園ノ一子ヲ寄セタルナリ花生ノ名ヲ称スルニハ非ストウ
○俗云は論を例のことばあるゝ月あるを花にして園の和
とあるるに作れくの作法とかゝるあるゝ作法の好色の
一段より二百余段の雪みよ儒仏の調と雖ども
作れく一部のこゝ他とそなへられ言る作法の系風と
冥て園の一論をかけるあるんもれい百余の段なる
あるを法者連歌の系地をあるて我作法の虚論
とたゝてあるゝ嘘八百のうまよる搭説をもて弾ま
談笑の説練としてあり一作者を冥中氏にして越中
の国津て他堂とかゝ人書益と風流の名とたゝて
ゝ知二百と極ぬ法にて笑部の意味ありけれ

不掃地論

東老坊

我庵者非都之辰已兮從本非爾所住心兮往時者任木葉之風而還日者涉蓬生之露則年兮月兮龍程尊過柔松兮菓兮斯迄荒果止乎測明麼無辭于茲烏矣今年者迎古郷之春而松者不忘住育之友陰浮世之道麼所斷詩人亦者被謂菖之松矣春者雉子之通菓居秋者山雀之尋堪而芳野之花麼更科之月麼捨此庭

而覓孰国矣斯言則在世人之前面自小倉之山莊而爲似熊佗我身共造庭小者不遺得木鍬兮直垣小者不知枝折結兮頃物迫事而不得已時者特右範東羽之樓踊而不如養其日之老柔龍在其所謂苟鬱之草因果歷然之喻事者打喰手盛之飯而息災也了伯父之事也柔我者好厭菓飯于霜後居歷欠歸于雨日則無麼羅心於起即而嘲那思六節數柔矣兎成角成乍成心麼世者不有安令習所哉或時

有掃好之和尚而訪給我庵止乎都々逸
詠庭之氣色而世者不知無限物也乎我
者飽我庭之第目而此庭之更不雨而露
麼凉數萩萩者假令有蹉跎野之奥共去
此不遠迚突麼給此住居則至者作我
庭之松風爲得手揚帆心地猿耶君夫人
情之令習迚物有好悪之変則人之飽其
庭之結構而有面白此庭之不掃地與我
者飽此庭之不掃地而有面白其庭之結
構面白意者五五也共人来而十倍此所

則我住而面白倍其所也乎其意奉何
則常求結構人者筆好紅粉之色則第悪
蜘蛛之巣而雖自娯掃地求者皆々不苦
耶自苦而慰人者可謂損之損厚哉君看
遊不掃地人者詠其身其俗之庭而歴我
宛慰人宛遊心之易遊了則爲得之得也
爲面倍之面倍乎或翁麼苟投此理而居
早而交爲居盧而行實與所增而論禪家
之意地則往極楽者易了共遊地獄者難
與哉和尚向何處去却堅而掛一向了則

月已ニ傾テ西ニ而秋色涼シ△誘引綴ヘ芝帰リ我寺ニ而
振舞雲土園之西風ヲ迚テ不ス無敢テ橋尼カ之髪ヲ
磨向答ハ有寔爾揚ケ棚ニ而不ス鎖サ例之戸而
新ヲ笑テ虎渓之橋ヲ而過キヌ矣
○議曰○宅撰ニ我庵は都のたつみしかそすむ世をうち
山と人はいふ也掾云ニ此哥ハ人ハ云ナリ我ハ云ハス去ラテハ
爾所ト書テ如斯ト註ス古抄ハ向レモ分明ナラスト貴遺稿
夜話ニ此評アリ此等ニ大和真名ノ當用ヲ称スレ和歌ニ假名
真名ノ取違ヘ多シ△淵明帰去来ノ辞ニ三径就テ荒松菊
尚存○與風ヲ誰とうしきるへきをむしろ孫の行もむく
のなまあるくれ○雨かくて世の中に人うらん世の松原のと

めくしれらの分ろうてやまとなれ△此書ノ山荘ハ嵯峨ニ在リ
定家卿ノ別荘ナリ△荘子養生主ニ縁督以テ為経ト註ニ
縁ハ順也督ハ迫也不得已而後ニ起ツ也△世譲ニ伯文カ甥ノ
草ヲ刈トハ嫡家ト庶流ノ梟報ナカラ渡世ニ身持ノ誡ト知
ヘシ右範モ東羽モ先師ノ猶子ナリ　○指述集ニ書カセ
猶のむかしりせれつるりとあふりかくあつりあつく裁梅スルニ所以ハ
我者ノ起語ヨリ合習ハノ緒語ニテ論者ノ老情ヲ激シ冬セリ
トユヘシ媚モ磨著心ヲ於起卧ニトハ倒ニ俳諧ノ雅言ヨリ歌人連
三哥ノ艶詞ヲ敷キテ此等ヲ大和真名ノ絶妙ト称スヘシ
△去此不遠ハ前ニ出タリ○領阿哥ニ山里のなかはるるわやしくえね
来しはさちへかさとうやすんなれ　△左太仲カ招隠詩ニ岩穴
無結構トハ隠棲ノ無造作ヲ云ヘリ　△大恵語ニ求之者苦

△君看ニトハ諸人ヲ指ス詞ニテ禅録ニ數多アリ△武公翁トハ老子ノ
取意ヲ合セテ我家ノ公翁ヲ云ヘルニヤ白馬遺訓ニ飛從ハ中正公平
ヲ風雅といふとなく中正公平の言わりとして中正公平の人ともち
ひくと云 △虚実論ニ虚を去て実をしるべからず一実なるを求て
虚をあるべからずとしも云 と此ニ詰ハ崔顥ノ要言ナルト和尚ニ對シテ
我祖ヲ讃セス或公翁トハ時宜ノ文法ナリ △禅詰ニ曷ク遊ニ天堂ニ誰カ
入ル地獄ニト云按ルニ或公翁以下ノ二三章ハ禅家ト俳門ノ意地ヲ競ヘ
タル論ハ此二三章ニ看破スヘキナリ △たれく什ていさゝの人の句ちら
おもしろくあり今ヲ誘フ詞ナリ △雪玉園ハ其寺ノ栽園ナリ
黄山ノ東岡ニ在テ書経ニ雪玉要ノ殊言ナリトス其ハ後其岡ニ
蓮ニ庵ノ別墅ヲ構ヘ或ハ黄山老人トモ云ヘリトス爰ニ橘尼
ハ白狂カ童名ナリ聯句行ニ其故アリ▲虎溪ノ笑ハ挙ルニ及

父云人連ノ形容ナリ
○後ニ云此論ハ曲折深くして虚実の例の論ありや
いふも作るも人間世の好悪の変あるを貴
もたらす法しかるを知とせり虚実の優游と
て又俳の人和と悪とあるの詳論の実と称を作るに
法論の和尚と先師とかなりけるの心なかりて其を
僧家の実を知るなくしてを俳門の虚と作るでは
のあるは敵あるよし禅家の遠ケの拙識なりけりと

菎蒻ノ論

廣達支

人は好といふは林和靖といふな蓋はなかりて易にお(は)ゆれとし

なれくるにのぼりて表敬をきこしめ
米の飯とうちもむ人を世下に負袖の沾はるれい
好樹和の論うらあるきうへ今や他説の論義うへ
人と豆腐のきうひをかけられて菰蒲のもてもく
まれあらうして武陵の森の遺文うも彼ら風雅と
称しのうりをを実うと豆腐のはうちを云い淮南王の
お好うり秋名の毒ってもを作へうもを作へ知へ
ふうきうきもを所の白雪とうれうて鶏濃の
茶むとうみういうして侍りのむうきうきうをとうきうい
鶏のをのまりけうあうふまうに菰蒲うふ和い

ふ濃の中を山家りれうもうてあのわときうふうり
云寛信和の庵はうを鶏きうれ侍うえ和尚の一稼下
うてんぬらの名とかのむうてせをあう味噌の信者
ううをあうをもうしうは三種の口論をなうを濃ま
鶏子のいうりをたうして一鉢一茶子のうひをかのむう
いを花をの家の口癖うして康方のみうを好事を
ひい大和の銅うを和好をふ好をまを言うてをいく
奇あうりうを言れい菰蒲の信者をうをあい豆腐
の大名ををしうるをもをへく行義の論をして今
見ら代のををまうを作うをのの信和を中をを作

歎言の信とあらそはされしも

○註曰△武陵公羽トハ芭蕉公羽なり　荒翁ノ風雅ト温飩ノ

好色トハ白馬轉読ニ祖公羽ノ笑言なり　當時ノ俳集ニ其

詞アリ再峯ニ及ハズ　△南陽雑俎ニ淮南王始テ製ス豆腐ヲ云

賦類ニ出タリ　○江談ニ云賓僧説ノ云ニ所図をみるよ

きようしてすおもはすえらびしをもてなしすさくれけり　△道元

和尚ハ曹洞ノ開山なり都ノ内ニハ越宗ノ寺ヲ建ヘカラスト

越前ノ永平寺ヲ本山トセリト爰ニ棒下ト八天不落ノ

名目ノ禅語ニ似タレハ云ルニヤ　△論語ニ一箪ノ食一瓢ノ飲回也

不改ニ其楽ヲ　△数寄ノ二字ハ和漢ノ通語なり　按スルニ遺稿

ノ夜話ニ数寄トハ漢文ノ好事なり長キ物ニハ短キヲ取合セ

圓ナル所ニハ方ナル物ヲ置テ物ノ数寄ナル故ニ茶人ヲ呼テ

数寄者トハ云ヘリ　啓蒙ニハ小野ノ大茶湯ニわき雲龍ヲ掛タル

類なり今ノ茶湯ノ捗ル物ヲ見レハ数寄ノ字ヲ訓ヲ失ヘリトゾ

△家語ニ邦有道則出而行ニ邦無道則蔵ルト云

○漢ニ云ふ此倫もを例の談笑ならしめ口ことのことはくさぶし

例の諷諫をこそをりとふ一しほ人界の好と棄を

とめれしかもかゝつて異意を虚実とし不自然なり

論されは言語の理も闇のまゝなるされは豆腐をとりあるれあり

い荒翁とかちゃなれ時もあらて変化を例のなくしくきも

かくこえ葉色のかくくれあるをらいてに風雅の和るあるとする

白和の二ツ字を和節の用ゝして　これらを俳諧の設

そうふ冊し作者も廣流気をして濃南の竺松

に往きて京都に分国の官吏なる何尾の臺閣より交
をむすびし爵禄の里紅の信を通じて當時の文物のみ
風土なりけるとぞ

○解類

長芋ノ解　　室山流

そもそも漢土の薯蕷(ヤマイモ)は自然成のものにして儀各
あるを山芋といふ也けるを歎冬(ヤマブキ)は山の露(ツユ)の
ことも和訓をも山吹のやうなれどもおほくは呼れし芋は
いまだ見れしありて山芋といひ里芋といひ自成化作
の差なれば山の芋を此長芋として作られし芋と

いへる作の名のある一しきりといひけるの月令に山芋
の種のならびといふよりも雷おこしを売りありて
よき味なるゆへに腎を補ふ薬なれども市にもあるはそ
ゆゑに此洲町の酒舟にいふもの也とぞいへる土間
にあらひて酒人の秋の酒はまでれば摂津より鈞の
を覚えをするを作らしく爐をおこすものは山へ出るといひ
学問をも勤とあり花を餘とあるさしもなし醍醐(土弁)なれば
儒者の仰ぎは作りてならぬまて今やは老婦の狂言
▲読本の狂言を書きとしよりも山芋の中を以て種
にあるを信者をいふよりなかなかにあらんかれてとろての

きゝひろめて法利と酥と云ふ事なり
しきりにたらく万物の変化となり
なれ大名のまゝ手もやもちに法を
れ飯盛の如く下和とおもはれ渇愛の毒
みをもてなしをはるとかれいおゆ
らあるをもて和訓のひきありてたとれ
ちんに雁のはをあるを命
○註曰○嘉元年中数子の作あやまちと云ふ
よりて色とあるまゝ接スルニ此ハ数子ハ酥醍ニ非ス
山ノ蕗ヲト云フ古文ナリ　△月令ノ文ハ下ニ在リ文ノ起結ヲ見

きゝ　△礼記月令ニ季春ニ田鼠化ス爲鶯ト云ヘリ季子秋兵
入ル大水ニ爲蛤ト云ヘリ　▲法花経ノ竜女成仏ノ段ニ変成男子ノ文
ヨリ狂言ト八例ノ粉成ナリ　△佐利ノ酥ト八隙買ノキ賞ヲ云リ
軽口ノ噺ナリ　▲韓非子ニ卞和抱玉璞ヲ泣ク璞ハ玉ノ
○注云ク解ヲ例ノ誤諸ヲ蛇ヲ草茅頭ト数文ヲ
同名異ナル物ヲ指ヲ蛇ヲ草茅ト蕗蕗ト
異名同実ノ不理ヲ解ヲ法ヲ文心服竜ヲ
角刀牛ノ釈文ヨリ引ヲ解ノ的中ヲ移ス命
ヲ中間ノ鼓舞ヲ伝ヲ儒仏ノ二字ヲ法ト記
て服地ヲ粧ヲ蛇ヲ草茅ノ用ヲ知ラルヲ
力ヲ一作ル山室氏ヲ越ノ福原ヲ聚ル
産ヲ山陰ヲ今ノ此ノ名ヲ

昼露ノ解

得巴

あるは秋草といふ木あり花ある秋なくて花あり
秋ちかき中に昼露とよふもあしまてしはらくも露ね
と云て△おろかしき解かくそうといふ露を施
露ぬれのあはれにおほえて露ねかしいふ人のすけ
也されは盧生か何かしの栄耀は▲夢ひとくえ
の道遥は皆ぜて昼の世はなれいはんそ理なれ
とふ人より露てみる内を極楽とやいさむ
て和らは我の心をさめたるの秋をとるまして

○きよのあはれは枕とかへちおふかの秋とそあはれんとう
もは莊周の胡蝶と化しける時も谷ならう
又おもくとひそ入らん道は爺居のそしられ也や
すむ志のそ▲黄帝の昼寝をとひてあそは華胥
いの国の不拷将より雲路の空に入てはなれたれ
古は文雄宰我の子昼寝を▲嘗しかれとも書寝して之て
紙洪のおかしきとなりしかとやまさらしをかれしも昼寝の
根えともかなへるに仲尼の高遊の損あれはよしと也いふ
朝起の悟ありしもて今は一気の汲時まへ我の細
うち蒸もしなり来ふし侍り迄ころふれたる枕も

おそこし肱をまげて我をわすれしことを楽むとやいはむ
○註曰△孫氏ノ日記ニ乎乎とひたえもいさゝかおもしろくなき
いびきをしたくおもしろさをいふところをも寝ぶりして
おそろしといびきあれこゝろとあり　△盧生カ夢ノ栄ヲ習
モ荘周カ蝶ノ逍遥モ前ニ出タリ　○古人一そのまゝのおかし
なれをちらりと懐へかいなく楽むなこそおかしけれ
△列子ニ黄帝昼寝夢ニ遊ニ華胥氏之国ニ其後天下大ニ治ル△論語ニ
宰予昼寝ヌ子曰朽木ハ不可雕ル也糞土之牆ハ不可杇ル△車胤カ
蛍ヲ聚テ読書ノ古モ孫康カ雪ヲ積テ学文ノ古モ諸書ニ在リ
細筆ニ及ハス　△論語ニ曲肱ノ楽モ前ニ出タリ
○注云け解しと虚実の当用として今を楽むは是とも
ゆかしをまを楽む入りのあそびをして夏よ紹陽の自在とかいて例の

人性をさとりと称主へし况や黄帝と宰予かゝる虚寐
の好処と裁断して食後の一睡に自己をわすれしめる
これを解の解として下し作者も文略の為に名採
ありて都下の歌よみとかし古事得の名もとよそ年ふる

○箴類

摺小木箴　仙里紅

おそらく万物万象の中に摺小木として地ありて月も
ふく耳もおもれとして用ゐられば神の手にはたらき用ひ
られ薩摩の勝手からくれ云られば△渾沌未分のかたち

より世月北用ちる抽しつ丁一しこれ海ちりとうる達
きへいら蓼のはれ肩といらくけめる幸の時北弟
とふやして利まうもこれ用ふれい鋸きもと時の
用ふんこれ海ちせ海さへたしこれの新茨
ちう大海りのお食ひてはこうこなたく鋸あるき
白みをもこうこひ青こてこいうてあこ面のこきる
おわしこやられこ海ちまのたこちあれ杭の外
のこくきこいこてそこ山るもれこの海ちるもれこは
ぬこたあて接い雷いきここれ海ちんゆと海さこ
雷北月の北言ちへ大師海こてあつき粥ここるへこ

のきと却おかまかこと山こ毎日の海ちのこ海こ
こちこたおて濃いあこ北あれちはこ海や
この祖師の行脚ちるこちの師のあとかくこ流
このこ憂ちかへこるこ師孫いこちこ師や
ちれこ人間の師と却少かこて師このはこ新ちる
ひこきちかここに不ちこ実こおの人却ちに北
境界こ光こちはこむこちこて混こ流ここる
へきこと北殿の山北師これこ流これ接川の杭の山れ
ここちあり天物の鼠の慢ちこへこあ時へ遊山
の弁当こ北れこちあるはこ悟氣の鈍こまこいこれ

て果を化はおよくてくらちまち一月とまれた
ぬ仙の笠とてとてらして仙盧ひくき谷をくへ
△ふもとくしやくるとてもなをもやとりとゝ嘆れわれを
こ界輪廻のくるしさもいつれのやとてなるとしたれ
古人の箴とんのは孤とゆるとをくを△肥馬軽裘の
人とうれしく汝をいつも禄分とてきとひ月とこの永
くくうれしとんの篇とあるもをのかをあるものふ
へくもあるとをこのもくはたんくいちうとんの下帯
とをもへくをも
○註曰▲荘子應帝王篇ト忽ト謨ト報ト渾沌王之注曰人皆

有ニ七竅ニ以視聽ノ食息ス試ニ鑿ニ之日ニ鑿ニ一竅ニ而七日渾沌死ス揆スルニ此篇ハ渾沌ノ氣ヲ赴向シテ始終文意ヲ服客セル結語ノ稱身ニ服ヲ着シ△忽翼緩辛ト云フハ俗語ニテ料理人ノ口授ナリ▲大師講ト八傳教大師ノ度トノ揆スルニ其日只中豆粥ノ初穂ヲ摺鉢ニ入テ摺ル木ヲ中ニ指入レ基所ノ棚ニ供フ此ホ様ニ起リテ諸国ニ色々ノ品アリトフ○ヲあたゝ芋ヲ所中ニ入レ煮リ其れ煮れ初メ煮ル時ノ試ハ嘗モ崗ノ序語ニシテ此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スシ△出蛙訊ニ山ヲ

と山ありもてとあり△論語ニ赤之適ス齊ニ也乗リ肥馬ニ
良ニ軽裘ニ△ほれて竹ニ みくさくるの赤ものをけむんるの
元ル和ノ名ものるてもあるとをそをもをみのとかん

○俗云世文字を書る罷の一格にして法帖を
俗にうつし世てむかしの人の物つくりなると好色の
二字を形容して蔵のつまを文と化くみなる事と
臆見の秘伝とする人を例のおもてつくりを
ちらし一生命の俗をとる也人
間を師匠の場とむさぼりて貪苦をかくす
あるなりなる例を誘実の説法なりと訓諫の
絶妙と称せしめ作者を西濃の北方に者て
仙石と申せしに貢鬱園と標号せしを郷子門人
授記のうる事なりとぞ

菅蒼蔵　渡吾仲

[illegible]の中にかくしたることなるなりて歌合の事
[illegible]なれりなるを歌もいひ伝へるなりと
の事類なんなるなれども歌の第一にあ
唾棄とさてくしあれいれるなるの洞宮
かりなるなるを地なるを中或を山なるなる
[illegible]唐壁鏡なるを伝なるの言葉なるなる法華経
[illegible]多法古なるいひ想思外なるして長命外
[illegible]訓を獻事の異語なるなる
なるなる法を和唐なるなるなる偏なる頌のなるなる
儒仏のなるなる名なるなる好悪なる人のなるなる

やしなひ肴など不拘のあつかひをさゝしてあるもあらでは
みて酌をよするをもそり茶をすゝめし●盧仝が言
ける詠て佳賓をまねきれとらせしを詩人文客の眠
をさましむるも茶の子とよぶ不拘のあつかひはひとり茶
を頭とやくもて書るを言落とて不拘はむかしの蹟
はの流しさしも両の事の和此都としも籾理もし乃ゆるを
瑄梅とはやゝまて露てはおりひ起てもまよし
こゝとも和よやりけておりひ州をもてふるは上むらし
▲虞美人の名とはし▲定家ろつて此桃んとおもひそ
おもろしもまでもあれんするもしまうやりは出され

やの此ようせさくせられあやしきれはて此比の風流
をさんれ服部和泉の三なりら又寛七ケの風土あ
まろひてもあるとあるきんを帰とえらひかうせさ
おほ定けの表物もあるぬせらう書ておく嫁など
おく男女の事とやりけ遊女は抱子のほまさし
てありてはよし蓋の綺とおほけん曼茶十種の香
とまろ川▲香家の絶の景らいれあてもま連理の
のちきろうえ孫家の写し此くる付あらん深し之へ
へ加りけ此衛の浮世とよろ伊り捨て笠一かいの法くり
まいで江戸の身のかりのおほく霧はゆのさとこれまれ

うき富士の煙にあはんとせし中來ほとゝきすとも
まことはしらすとも詩の杜所に入を△竹に不背の剱
ちらんちらとともけれの思ひさん鶴に(スハ)と此れのかゝるを
とをやさて帰り宮猿のむかしを思ひしかも
蝉の声よやまひてまとひ何ともあの思ひをとまりね
まろき△梵網の戒にひとしく守りて△家従の雑物にも
えんきれいろある義人のまなかしぬるかゝれ守まと
おいやらんと後の君子に根まとをそへれて飲ぬ
△執まおもしらをへうし匠

○註曰▲世説ニ王敦毎ニ酔後ニ以ニ如意ヲ敲ニ唾壺ヲ歌ト云

●山谷ガ寶玄之軒ノ詩ノ註ニ所謂君沈安鏡俟朝之世良君沈古也
△漳州府志ニハ沈安姑トアリ△羅山文集第六ハ多波古ト布施
トアリ吐白雲諸ナリト△本草洞註ニ煙艸或ハ相思艸也ト云
△文選ニ伯倫ガ酒徳頌アリ茶ハ酒ニ及ハズ△漁隠叢話ニ盧仝ガ
茶歌アリ茶ハ酒ニ及ハズ撰スルニ似タリ一段ハ茶ト酒トノ好悪ヲ云ル
二段ハ名言ハ常ニシテ人のしらぬまゝ頭とよくこゝろをとへ
俳諧ニ漢文ノ勢ヲ假テ詞ニ千里ノ野ヲ擴ケ筆ニ万里
ノ地ヲ縮ムト云ヘル文ニ●形容ノ絶妙ト称スヘし
前ニ出タリ▲定家卿ノ古文ハ詠ニアリ式子内親王ノ執心ナリトワ
▲吹笛図ハ玄宗ト貴妃ナリ其詩ニ三郎推指貴妃吹ト云三郎
ハ玄宗ノ雅名ナリ○あり常に從庵山うきせをそれは
ひまいきもいきまなりけり時勢もうかれ○あり時寺世の中

とつてゆくほどかくうらがかりのやうりとかしもあれ〇あり
富士言元よふひくかりの響のをちらまくてりまんさるぬ
和歌のひ〳〵△無心所着ト八和哥ニ誦方ノ躰ニ之 △秘細経
八持戒ノ御法ナリ筆ニ及ハス△家語ニハ辨物ノ篇アリ物ノ奇怪
ヲ記せり △論語ニ酒ハ無量ナリ不及乱ニ云く
〇ほ云此文を劉亮躰ナリていふて疑躰よもいふへし
誠やまれなも猿猴まいりてあり法師のかりの響ハ空く
又は元の寓言あつめ世んおおて其の所字をあつめてこの哥の様を
和らし此文の用をとりるこれらを托物比興としいひて
世の用とするなるにそ色

猿蔵　　僧一空

あらそいや猿は山王のにらしやうらし花さく奥山
まよひとしてをかくしてゐて。猿は昔猿の名をかゝむり
〳〵なるを孫子の様もさらえて木の実ふ猿とて小
ちらうしゆて正月のみならまいる農業を祝ひ斎家
と称して武家の御厩をまもれるより△十二支の中に
えらばれてゐるとさへかなるとて秋のあはれもれ
和漢に名をとゞめて詩に流てり哥よまれまた
それの中にも●巫峡の曉に詩家の腸をたちきらん
より木曽の山中に人をよびて哥人を御穫かなとハ
せらるゝ猿の智恵の中にもあらしことやいはむそれくり

世の中とうかうかて木のまわり行とはらへ禦の絶
とはらえて勝たちさけあれ実をぬきとて頬よ
かゝし△佛の障はあまさいはるすあちこ施て楽むく
つきをはへいさりはてとて禅宗の不借といふおて
△六窓一獮猴猿の早とくへてとあれりそのちへの手よ
かられて刀よ獮猴の舟おと倒り枝よ菩は竺安猜
とならよ盤よ招きのくらし作も掻よ銘詞のあよ
あきもとのらん此てさなまりてまうし鮮ちか此
又世をうそて猿おものゝ名をそてされ獮猴の字有 枝
よあやむおて従来のへす笑られはりを修わふ

庚申のかくてよ待りて祝さる聴さるを勝まで
つれて言さるを△伴川の実用なうつ言まであまらふ
へく犯すてこれさわ俳諧の自在をまれしも
○誰何○詞跡ニ見え代えちゝやかやうされんのいたわなら
てせものむまをまて△十二支又ト八子丑寅卯ノ十二合ヲモイテ干
ト八甲乙丙丁ナリ　●巫峡八猿ノ名所ナリ断腸ノ詩ハ数多
アリ挙ルニ及ハス○古今集ニをちこちれきのきもきつね
山中しれおわつらあくも喚子する名摽スルニ此哥ハ古今
ニ云鳥ノ傳授トスル理ヲ便議ニ称ノ頁鳥ハ集ノ古又喚子鳥ハ
猿ノ古又ト云ヘル僧説平話ヲ改又ハ例ニ獲家ノ意地ナレハ
其事ヲ俳諧ノ面通味ナリトヲ △傳語指南ニ猿ハ心臓ノ
火ナキ故ニ手脚ノ働ヲ火ト成セリト△傳灯録ニ僧問フ如何ナ

得見性師四聲公舗屋上有六窓内右方中一間擴之上　△二程
全書視聽言動四箴アリ伊川八程正叔ノ撰ニ出ル
○孟子曰仲尼不居巖牆之下孟子盡心篇
ハ孟子ノ言ニ人間ノ世智辯聰ヲ去テ自己ノ本來ノ
天ニ帰スルヤウニ喪ノ時ニ伊川ノ記ノ
ト敵シテ他ノ言ニ人天ノ兩用ヲ捨テ一言ノ語
ノ変化ニ入レタル一子録ノ遺訓ニ出ル者作者
ハ國語中ニ出ル國ニ言ヲ安義ノ廣ニ張ル者ニ語文
ハ字知言由的ト師ニシテ遯庵語集ニ義用ノ名
ハ出ル

士洒竜蔵　長鷺洲

世ニ不驚甲ニ方ヲ以テ毛ニ容ヲ知ル
ヲ程ニ伝ヘ人ヲ以テ人間ノ元言ヲ
ヲ知ル人ヲ以テ人ヲ知ル者ハ
士洒竜ニ知ル知ル洒竜ヲ知ル
元人ヲ求ル知ル知ル
ヲ知ル知ル知ル知ル秋ノ月
ヲ知ル知ル知ル知ル
知ル知ル知ル知ル
知ル知ル知ル知ル

△雄略の時に伯耆国に住うれる韓人の朝鮮にて
串海軍柳海軍の名とあるを思ひ合て彼の国
にえて加ることに海苔の名と称せるなり朝鮮人の
つも價をあらそふ人ちなり　そもそも海綿は
鮮にてくみとるなり　黄海の海苔の
いとりはなして　昌平山海軍勝の猪にむこいれとん
菜齋の手にもとりはなしてこれ神農も
めてもて又後にて伯耆の住て山陽の都に入れて賢
おさまふ加茶と名付いつもうるこのこれあり
もてあそばれて　梁の惠王もとをはけとを
山雪も加ちりの雪もとりもとしこ間のもの
[illegible]　手の[illegible]ほうこ[illegible]
極のものの[illegible]
[illegible]
[illegible]

河内ハ周顕が保隠より海産ニ海塩ノ富ト知レシ能登ハ海産
ノ名産アリ海苔ハ千トシテ刻メル物ナリ ▲戰国策ニ易牙ハ齊
桓公ノ臣ナリ百味ノ知テ料理ノ名人ナリ ▲神農本草ハ前ニ出タリ
△子虛子漢書王褒ノ篇ニ君子遠庖厨ヲ云フ ▲西宮記ニ蓋大將モ源氏
ニ好色ノ河内ヲ見ル早蕨ハ海産ノ香ニ匂フト蓋ト富言ナリ
○宋玉ノ賦ニ情ヲ寄スル山ノ井ハ浅クシテ人ヲ
ヲフ抽ヲ △梅ノ実ハ酸クシテ人ヲ
△傳語抽英ニ芳草ヲ抽テ国傾ケ礼ヲ和ノ意得ヲ
○酒ハ云ハ蔵ヲ御僧ノ二用トカヨシテ始ヲ大酒ノ酒蔵
ヲ称シ中ヲ酒ヲ酒有ノ茶類ヲ云フ孫ヲ自ヲ放
埃ヲ云フ むしろ ヲ茶ノ建ル ヲ一ツ自適ノ
道遥ヲ云フ 文章ノ形容ヲ云フ

ヲ紙貨ノ筆格ヲ云ハ鹿実ノ蔵ヲ云フ

○記類

紙衾ノ記

芭蕉翁

たそかはくゝ たそかはくゝ 知らかほ
ゝ ゝ 衣ヲ
ゝ ゝ 衣ヲ
ゝ ゝ 衣ヲ

[illegible]の君といふひ歌のたゝ毎のいふせをこゝにて
[illegible]の国[illegible]ふ[illegible]あるゝ人のたゝ[illegible]
越後の濱くに[illegible]の[illegible]の[illegible]
月とやゝ[illegible]蓬[illegible]
のきゝくをゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]国大[illegible]
[illegible]
○註曰●長恨歌ハ白樂天ノ作ナリ●文選詩ニ文綵双鴛鴦裁為合歡被

●西白文集ニ丘迥中新月色二千里外故人心○彰古人ノ
きゝくをゝ[illegible]
○[illegible]記を[illegible]
と[illegible]伊勢の[illegible]
又行[illegible]
の[illegible]
[illegible]

何尾亭ノ記

井上重平

[illegible]
[illegible]

きまく商家のいとなあるいたる市中の盛さかくは
ゑ也けるを茶家の庭已ふる。せとらゝはらゝそ
あれもくもあふ稲葉山の林下ゝてかも色と
さるる百歩はうゝ茶ゝあるふんは指図とりゝて
はそまに曲庫とはをて勝ゆを二五のあるお葉
ふれい婆婆のたゝりはををを火も薬ふるは
かゝゝはをふまをゝれを高ゝかけはひ濃
の寺はゝゝかも庫を葉のゝは尚ゝはゝおてはを
ゝ郡ゝ庫の体お寄も一ゝゝ二ゝをかもゝゝ
界の山吹も出堤のゝ人かゝゝ我をあさゝゝは名と

愛ゝて茶ゝ湯はゝゝ古風をあさむをゝも人を山ゝの
紅白ある事と同ゝゝゝて山茶の風もれゝよおそゝ茶
の面は事ふゝゝ色のあをひゝもるはゝをゝれゝかゝは
山ゝをゝれゝんゝをゝゝの奥ををゝゝてけゝは世信と
をゝふれゝゝる山は茶ゝ山の使ゝはをゝて運二
の山ゝ房ゝは名を求るはゝゝて何ゝふく何尾の二字
と頭をゝはゝて稿ゝをの山もゝををはかの。ゝの言
は事風も何れの尾ゝゝとはやゝゝはゝゝを言ゝて
のゝゝゝはゝてあゝゝゝを茶盤の言せゝゝく
投庫の利用を求あゝゝゆゝ金ゝゝゝ本魚のゝはゝて

未来の因縁とむすびたる毛尾を怪しみ
何の尾ありのもとゝ
うゝふ稲荷の法やゝ
かりてあるけるわゝ
山猫の古風あれとゝ
菓子菓子此未来因子さへかの地ゆゝ
あるりて行報の掛ゝ
も宮もある菓人ゝ
ゝり根もあゝ
ゝゝてゝゝ

拙ゝ我と菓人ゝも他人ゝも他人ゝて後生を祈ゝ人ゝ
山尾ゝゝ人ゝゝゝ

○註曰△仙傳ニ董公方ヲ受ハ前ニ出ヌリ○表撰ニハ前ニ出ヌリ
△古れゝ竹ニ嘆ゝるの所ゝ射ゝ返魂法ゝゝゝ
ある桜スルニ此ニ奇ハ他外ノ歯居ヲ云ハントテ安倍安ノ二子シ
云イ起シ嘆子身ニ返魂ノ意ヲ結ヘル詞ノ鎖ハ更ニシテ
此等ノ躰ヲ論センニハ無心所着ノ絶妙ト称スヘシ △測明カ
菊ヲ愛セシ故ハ細筆スルニ及ハス接スルニ此ニ幸ハ八前ノ花ヲ
ト云スメ菊ノ名ヲトヽ云フ所ハサ前ト歌トノ御音ヨリ無理ニ
古人ヲ粉成スル意地ノ屈突ハ云ニ知キヽリ ○菓好ノ所ニ
ゝゝゝゝ浮名ゝ
ゝ

とゝより云へるなるべし　△昆布に山椒よりこれをとゝふへ狂言
ノ鈴掛に作る謡ノ詞より掛ケに掛ノ乗図よハ唐書ノ意より
ト臺部ノ音曲ニより彼物ト隠見ノ法より

○俳諧記を虚実の當用といふもむかしより所尾の三ツまと
釈もるに才一を歌人の艶曲と敵一第二に茶人の風儀
とこゝろもてなを俳諧のこゝろ地作者と茶人あるへ
俳ノあるに俳諧のこゝろ踏うて自己の名利をうら
ひて他人の内作と餐（アハキ）るこゝろを実のこゝろ格うて
珍るへきを実の虚実あり作者の性癖を文学
あるてやうり掛子内の先折ロ也

二方樓記　　桐尾角

二方樓と云ふ半を山ともいふ所のなかの地
の大部なれいもうるにあるに此書を写入
あるに風雅ふくはをれ輪ノ言とおもるれを
きのふ此ろ有此東ろるをとゝ山ノ風雅を
ものむかをきふの事に部の故ふんあるをねて
ものにふ人の只方あれ入るに人の中方ノ皆
きて至るあるふ下ノ方ノ山ノ所あ此ふ
らるあ一いを第流の一言屋ノ世方の樓し
月ノ方ノ流のれ百ノ俳諧大悟
の場ノ方ノ碍龍と頓論ノ此ノ悪と論を

[illegible]と言ふの趣あり[illegible]山れ一味の優[illegible]のあんや文[illegible]言二言の[illegible]

○註曰△岳陽記街遠山吞長江北則岳陽樓之大観也△[illegible]竹月花[illegible]

[illegible]

二豪俳側乎如螺盃[illegible]鱗[illegible]

○評云[illegible]

[illegible]

酒[illegible]と[illegible]

作者[illegible]江の湖[illegible]

と文盛[illegible]

壺中園記

東苾坊

昔々遊越之新深而頃有水興月之半端西乗竹莊迭暑日則鑑亭迎涼夜歴不尤有而麼江山清絶之地而謂不山有之風雅處矣或曰有遊蓮咲寺而盃徘十六宵之影今或夜有泛月涼敷江而舩遣二千里之心今其友有名深于詩今月出于歌今謂風流使人醉矣乎我且漂其地而中

来ハ能諧之人ヲ則独有テ尤角之男而年未及
ヒ十三歩于然知渡世人之実而識遊文月
之虚了則出而有染花皇之色而教曙公
之千金舞雪入而有澄月雪之心而盡顔
子之一瓢佗雪奚爾則我家之俳諧而斯
者遊虚実歩見綴希有之男哉共其須者
若了則思置等閑事来矣其後過十年了
共不閑其人之行末則尤在那所覚尤許
社止手此頃見雲鈴之状則伝渡之浦山
陰有和漢不思議之壺而覩則有月花之
別世界興哉今時假同連之遠同鑑而遊
是寄万里之情了則誠哉園林備四季之
花皇而其口者呑雲夢之八九雪其奥者
適蓬瀛之五山況夫黄金之花咲了其
国之山副近了則花木者不待初櫻之春
而月出麝忘紅蓮之秋皇矣言則飽菓珠
之八珍而孫侍鳧年之之會歩其輩者騒
人雅士而壺中之主者例之尤角也来

○註曰竹在八慈竹亭ナリ鑑亭八七里カ別観ナリ何モ新
浮沉騒ノ名アリ●白氏ト二千里八前ニ出タリ●司空曙遣

妓ヲ詩黄金用尽ノ教歌舞ヲ△頌子ヲ一瓢ハ前ニアリ▲玉蘭
盆経ニ同連ノ天眼通ノ支アリ今時ハ其経ノ熟語ナリ
△上林賦ニ呑ニ雲夢ノ八九ヲ脳ニ蓂莢ヲ▲引子ニ方壺瀛洲
蓬莱等ノ五山アリ郊祀志ニ之導アリ何モ仙境ナリ
○万葉ニ黄金花ノ歌ハ前ニ出タリ▲蓂莢珠宮ハ仙観ノ常
ニハ珍ノ美味ヲ供フトフ▲弥勒下生経ニ兜率内院ニ在テ之
會ノ説法アリトフ△梅スヘニ會ト八佛諧ノ會席ニ詞便ハ
○語ニ云ハ詩を文ヨ嬈曲ありて徐を名説ならんの
ヘ云ハ妓ヲ賀と称中ヲ此座の
由来を記ス妓ヲ園の妓樂とあるなるべし
い人境の富用ヲ尽して云ふと記中の
一弊とするも

慧ヲ庵記

土方以立

就世音寺ハ西の岳ニ一宇ハ建ヨリ石花
の不動ヲとあるを山さ〻に葉く慧ヲ〻れ
ヲ嬉ヲて慧ヲと庵ヲ名ヲりけれいけ名ヘ之而
ヲ以ヲて越の海ヲ山と云ふ一脈ヲ下ヲ北
風ヲ防ヲ為ヘ為ヲ〻ヲ〻ヲ栗稈の山畑ヲ
住ヲて居ヲるヲ低ヲ〻れ凌雲擣軍ハ眺軍
ヲ山ヲ〻ヲて有ヲる西面の葉表板ありて青毬
の苔ヲ点ヲ〻れ東郭ヲ素御し耶ヲる不ヲ

ゆうとぬ。はるの雨ふるうゝ木の芽はるのかゝくれ
いづこ天竜寺木屋しけみの用ありて一ぱい竜堤
の遠ゝまでくもあり。山も多くかすみ雲
の色彩をあらそひ。こゝろ〳〵に俳利也一座
はなをうたひ。ありて和歌をや。俳諧の山くも井戸はを
枯木はとくゝきに書はれ校の色をんとうれて帰る
の清をゆゝ。一しきり。雄滝川の流さとく
小夫部を月のてに布引て。ら風さを那のうゝ
ゝ立ゝ。ゝ。ゝ。

とゝ〻〻壺峰と注書の便覽ニ出たれ共へて文とと
△五車北史人ことゝ云て頼ゝ〻獅子崖の三字を即
勝ゝ〻理屈の人入へゝ〻ゝ〻ゝ〻の畢鉢羅の鑰と
ゝ〻ゝて行ゝ〻禁裡の石と云ふ〻ゝ七寺伽藍の
辨おちゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝるにゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻慧ゝと
ゝるゝゝゝむゝゝゝゝゝゝて古く居くゝゝゝゝゝゝ

○俗云此記を唐突あいまいにして俗さく曲節の一斑
を窺ひ見るに面の風流にはあらずの詩歌とも
たくらべて全く詩賦とつゝしへきくと慧少こと抑こゝの
誠諧より百世に両名の作文とあるを記文の
起結ちるに編輯の所作を文めちらしてこれを
鼓舞のうたとさゝゝゝゝゝゝ一作者を越の石(ユスルキ)
位を弁をもてして樗菓を擂号ありかゝりて
先師の指教より解着して儒書を経とあちこへ和音
連歌とまとる今此選切と名を称をの

唐梯通美の人とつゝしまを

文撰巻之六終